

[原著論文]

場所を表す名詞に下接する格助詞「に」「で」「を」について — 日本語教育の観点に基づく先行研究の整理と課題 —

岡田 美穂¹⁾, 奥田 俊博²⁾

The locative particle *ni*, *de*, and *o* attached to place nouns: A review of prior studies and examination of issues from the perspective of Japanese language education

Miho OKADA¹⁾, Toshihiro OKUDA²⁾

Abstract

Based on existing research in Japanese linguistics, this study aims to summarize the properties of locative particle *ni*, *de*, and *o* attached to place nouns, from the perspective of Japanese language education. It then aims to identify the problematic aspects of *ni* as in *kurasu ni kankokujin ga futari iru* ('There are 2 Koreans in a class') and *de* as in *ano kissaten de kōhī o nomimashou* ('Let's have a coffee at that coffee shop'), in order to reveal the stages of development involved in Japanese language learners' acquisition of *ni* attached to place nouns.

KEY WORDS : locative particle *ni*, *de*, *o*, Japanese language learners, acquisition of *ni* attached to place nouns.

1. はじめに

本稿は、場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」が日本語学習者によってどのように習得されていくのかという点を中心に先行研究を整理し、課題を明らかにすることを目的とするものである。

日本語学習者は、外国人のための初級用日本語学習教材において比較的早い段階に、「に」が人や物の存在場所・到着点を、「で」が動作場所を、「を」が動作の行われる場所であり起点・出発点を表すことを学習する。これらを学習した後、日本語学習者には、人や物の存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤りが現れることが知られている。その後、

日本語学習者は日本語能力が中級レベルになっても、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」(顧1983)¹⁾や「クラスで2人韓国人がいる」(岡田・林田2007)²⁾のような誤りが見られる。日本語学習者の場所を表す名詞に下接する格助詞「に」の習得が、どのような発達の過程を経て進むのかを明らかにするためには、上記の誤りが、日本語能力が初級レベルのときと同様に、人や物の存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同によるのか、それとも異なる用法を表す「に」と「で」の混同によるものなのかを明らかにする必要があると考える。また、日本語能力が中級レベルの日本語学習者に見られる、例えば「部屋でテレビを置いたので狭くなった」、「中河原駅の前で歩道橋を作っ

1) 九州大学大学院比較社会文化学府
2) 九州共立大学

1) Kyushu University, Graduate School of Social and Cultural Studies,
2) Kyushu Kyoritsu University

た]、「旅館の近くに散歩した」、「多摩川のそばで散歩する」等のような誤り（鈴木1978）³⁾が見られなくなるためには、日本語学習者が場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」のどのような特徴を捉えなければならないのか、格助詞「に」、「で」、「を」の用法を整理する必要がある。

本稿では、まず、場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」を先行研究に基づき整理する。その上で、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」や「クラスで2人韓国人がいる」のような誤りが、どのような用法の「に」と「で」の混同による可能性があるのかを探り、今後の課題として示すことを目的とする。

2. 場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」

日本語能力が中級レベルの日本語学習者が場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」を正しく用いることができるようになるために必要な特徴とはどのようなものかを整理する。その際、伝統的な国語学における格助詞の研究、生成日本語文法研究や格文法に基づく格助詞の研究、認知言語学の観点による格助詞の研究、意味論・統語論を援用した格助詞の研究等を、なるべく年代順に概観し、必要となるものを取りあげていくことにする。

(1) 格助詞「に」、「で」、「を」

「に」は、山田（1922）⁴⁾によると、体言に付属して、それが静的目標であることを示し、また副詞等に付属して用言の修飾格に立つことを明らかにするものであるという。「静的目標」とは、「を」の「動的目標」に対するものである。「に」の大きな特徴としては、静止的に位置を指示する（山田1922⁴⁾、此島1966⁵⁾、大野1977⁶⁾、佐久間1983⁷⁾等）ことである。そして、事物・作用・状態についてその存在の場を示し（田中1977）⁸⁾、位格、位置を指定する（山崎2001⁹⁾、此島1966⁵⁾、森田1989¹⁰⁾等）。「に」は、尊敬表現の形式として用いられる（松尾1969¹¹⁾、西田1977¹²⁾、大野1988¹³⁾等）。「に」は、行為・動作・作用のいわば道具立てを整えるものであり、一般に、間接目的あるいは補語などとも呼ばれる（田中1977）⁸⁾。比較の基準を示す場合や状態のあり方を示す用法では、形容詞・形容動詞にもかかる（田中1977）⁸⁾。

「で」は、山田（1922）⁴⁾によると、動詞に対してはその作用の行われる場所または時、あるいはその作

用の方便、材料、原因、由縁などを示し、説明存在詞およびこれに準ずるものに対しては、陳述の賓位を示すものである。「で」は、元々は動詞が中心となって表す事態にとっては付加的な存在であり、動作・作用の道具立て、背景を整えその表現を支えるものである（田中1977⁸⁾、間淵2000¹⁴⁾）。「で」は、それ以外・それ以上ではない、それを対象範囲の限度とする意を表す（森田1989）¹⁰⁾。動作主格の用法があり（西田1977）¹²⁾、「で」が受ける体言は普通複数を表す語である（鈴木・林1985）¹⁵⁾。

「を」は、山田（1922）⁴⁾によると、動詞に対してその作用の影響を被る目標を示すものであり、動作の影響を受ける対者を示すもの、いわゆる自動詞で使役作用を作るとき、その使役を受けるもの、自己が移動する作用に対してその行われる地点を示すものである。「に」の「静的目標」に対し、「動的目標」である。橋本（1969）¹⁶⁾では、「を」は常に用言に続き、その用言に対する客語を示すと述べられている。客語とは、橋本（1969）¹⁶⁾によると用言が動作（活動）を表し、その動作が他のものに到り及んで、これを左右する場合に、その動作を直接に受けているものを表す言葉であるという。

(2) 場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」の特徴

表1は、日本語能力が中級レベルの日本語学習者が、「に」を「で」や「を」と区別するために必要となる場所を表す名詞に下接する格助詞「に」、「で」、「を」の特徴を示したものである。

表1から分かるように、日本語学習者は、「部屋でテレビを置いたので狭くなった」、「9時に中河原駅で集まった」（鈴木1978）³⁾に「に」を正しく用いるためには、動詞が表す移動性に着目しなければならない。日本語学習者が、動詞が表す移動性に着目することができれば、「に」が「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を身につけることができると考えられる。

ところが、移動を表す動詞は、「に」だけではなく「を」とも結びつく（寺村1982）¹⁸⁾。そのため、日本語学習者は、「部屋でテレビを置いたので狭くなった」を正しく用いるために動詞が表す移動性に着目し、さらに、「旅館の近くに散歩した」を正しく用いるためには、「を」が運動を表す動詞と共に起する名詞の距離または空間の全範囲にわたって続けて一方向に向かって行われることを示す（久野1973）¹⁹⁾ことを身につけなければならないだろう。他方、「多摩川のそばで散歩する」

表1. 場所を表す名詞に下接する格助詞「に」, 「で」, 「を」の特徴

<p>場所を表す名詞に下接する格助詞「に」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・静的目標を示す。動詞に対しての目標はその動作作用の出自または帰着する目標、動作作用の存在または落ち着く場所を示し、形容詞に対しての目標は場所、存在詞に対しての目標は存在の場所を示す(山田 1922)⁴⁾。 ・状態、存在の動詞と共に用いられるときは「場所」、移動動詞と共に用いられるときは「移動の到着点」を指す働きがある(國廣 1980)¹⁷⁾。 ・存在文の基本的語順は「場所(L)に、対象(A)がある/いる」(久野 1973)¹⁹⁾。 ・存在を表す表現においては、物理的な空間と存在対象との結びつきを表し、特定の集合における要素の有無を表すという解釈がある(西山 2003²⁰⁾, 金水 2006²¹⁾。 ・存在を表す「に」がその場所に定位する、もしくは存在するという状態性の表現で、「で」のような行為の場所の限定意識がない(森田 1989)¹⁰⁾。 ・移動を表す「入ル、着ク;泊マル類」, 「卒業スル、離レル」等を除く「出ル」動きの動詞類, 「通ル」動きの動詞類, 「行ク、来ル、帰ル、戻ル」, 「入レル類」と共に用いる(寺村 1982)¹⁸⁾。 ・時所的定位、目標(ゆきつくところ)、拠点を示す(佐久間 1983)⁷⁾。 ・「立っている」「行っている」等の存在動詞の資格を持った動詞と共に用いられると存在の結びつきを作り、「もつ」「かりる」「かう」等の所有動詞と共に用いられると所有物のありかを示し、「みえる」等の認知活動を表す動詞と共に用いられるとその状態のあり方を示し、「できる」「はえる」等の出現動詞, 「つくる」「たてる」等の出現性の意味を持つ生産動詞と共に用いられる出現物のありかを示す(奥田 1983)²²⁾。 ・点的に限界点を明示化する。共起する移動動詞句は過程を表さない(北原 1998)²³⁾。
<p>場所を表す名詞に下接する格助詞「で」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・動詞に対してはその作用の行われる場所、あるいはその作用の方便、材料等を示し、説明存在詞およびこれに準ずるものに対しては、陳述の賓位を示す(山田 1922)⁴⁾。 ・デキゴトの存在場所を表す(定延 2004²⁴⁾, 山田 1981²⁵⁾, 松村 1957²⁶⁾。 ・動作出来事の動詞すべてと広く結びつき、出来事を包み込むより広い空間を表す(寺村 1982)¹⁸⁾。 ・確実に場所の「で」に包含される要素は主格成分に限られる。主体のありかを表示する(菅井 1997²⁷⁾, 浅山 2002²⁸⁾。 ・動詞が必須的に要求しない項である(仁田 1997²⁹⁾, 益岡 2000³⁰⁾。 ・断定の助動詞「だ」の連用形である(大野 1988¹³⁾, 田中 1997⁸⁾。 ・動作が起こる場所を限定する(森田 1980³¹⁾, 田中・松本 1997³²⁾。 ・動詞文ではない文に現れ、限定を表現する(間淵 2000)¹⁴⁾。
<p>場所を表す名詞に下接する格助詞「を」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「動的目標」を示す。動作作用の影響を被る目標を示すもので、その目標が作用を受けているか、そうでなければその目標によって進み動くことを示す(山田 1922)⁴⁾。 ・運動を表す動詞と共起する名詞の距離または空間の全範囲にわたって続けて一方向に向かって行われることを示す(久野 1973)¹⁹⁾。 ・動作との結びつきの強い動作中心の表現である(田中 1977)⁸⁾。 ・移動を表す「出ル」類と「通ル」類等と共起するが、到達点には「に」も取るものもあり、「で」とも広く浅く結びついている(寺村 1982)¹⁸⁾。 ・「通ル」類と共に用いる名詞句は必須的, 「通ル」類の中でも「歩ク」類と共に用いる名詞句は準必須的である(寺村 1982¹⁸⁾, 仁田 1997²⁹⁾。 ・「経路」, 「経由点」, 「起点」を表す(奥津・沼田・杉本 1986)³³⁾。 ・「経路」を表す「を」の用例は通過点・移動経路・移動領域に分けられるが連続的であり、通過点は他の用例に比べて客体化し易い(加藤 2006)³⁴⁾。

を正しく用いるためには、「を」が動作との結びつきの強い動作中心の表現（田中1977）⁸⁾であるのに対し、「で」が単に動作が起こる場所を限定する作用（森田1980³¹⁾、田中・松本1997）³²⁾しか持たないことを身につけなければならないことが分かる。

3. 日本語学習者の場所を表す格助詞「に」の習得における課題

日本語学習者には、日本語能力が初級レベルのときに存在場所を表す「に」と動作の場所を表す「で」とを混同することによる誤りが現れることが知られている。「食堂にうどんを食べた」（久保田1994）³⁵⁾や「家である」（松田・斎藤1992）³⁶⁾は、日本語能力が初級レベルの日本語学習者の誤りである。日本語能力が向上し中級レベルになっても現れる「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」や「クラスで2人韓国人がいる」は、初級レベルと同様に存在場所を表す「に」と動作の場所を表す「で」との混同による誤りなのか、それとも初級レベルとは異なる用法の「に」と「で」の混同による誤りであるのか。もしも中級レベルに見られる上記の誤りが、初級レベルに見られる存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤りとは異なるものである可能性があるならば、それを仮説として立て検証することが今後の課題となる。

(1) 到着点を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同による誤りの可能性

顧（1983）¹⁾は、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」のような誤用例を示し、中国語を母語とする日本語学習者にとって「に」と「で」の2つの格助詞が中国語の1つの介詞「在」にあたるため格助詞の習得が難しいことを述べている。つまり、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」の混同があるということである。他方、日本語能力が中級レベルの日本語学習者は、「部屋でテレビを置いたので狭くなった」のように、「に」を用いるべきところであっても、動詞の表す動作や作用に引かれて「で」を用いることが報告されている（鈴木1978）³⁾。このことから、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」は、日本語学習者が「飲む」という動詞を用いているにもかかわらず、「で」を用いなかったのには何か理由があると考えられる。それは、日本語学習者が「に」の「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を身につけようとしているからではないだろうか。

日本語学習者は、上述したように、「に」と共に用いる動詞が表す移動性に着目し、「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を身につけなければならない。その「に」は、何程か離れて視線の向かうところ、「めあて」としての位置を占める趣きがある（佐久間1983）⁷⁾という。「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」は、「あの喫茶店」という何程か離れて視線の向かうところを指しており、そこへの移動を前提としている表現なのではないか。

佐久間（1983）⁷⁾によると、「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を示す「に」は、何程か離れて視線の向かうところ、「めあて」としての位置を占める趣きがあり、ゆきつく場所、到着点、成り行く状態、変成する（した）事態、～のために～をめざして（目的）、人をめあてにして、動作の向けられる相手、物をめあてにして、動作の向けられる対象、動作の（影響）の及ぶもの、使役命令の向けられる相手、何々させられる人を示すのに用いられ、これらは目標、あるいは「ゆきつくところ」を示すと言うことができるという。つまり、日本語学習者は「あの喫茶店」という何程か離れて視線の向かうところを指すために「に」を用いており、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」という文には移動を表す表現を用いることができなかったものの、「あの喫茶店に行って（移動して）コーヒーを飲もう」という文を頭の中に描いていることが推測される。

すなわち、日本語学習者が、「に」が示す時所的定位（佐久間1983）⁷⁾を身につけようとして、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」を混同し、「食堂にうどんを食べた」（久保田1994）³⁵⁾のような「に」を用い、また「いる」のような特定の動詞に着目し「に」を過剰に用いる（蓮池2004）³⁷⁾のも「に」が示す時所的定位（佐久間1983）⁷⁾を身につけようとしているためであると考えられ、一方、「に」と共に用いられる移動動詞が「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を身につけようとして、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」のような「あの喫茶店」という何程か離れて視線の向かうところを指すために「に」を用い、また「入る」のような特定の動詞に着目し「に」を過剰に用いる（蓮池2004）³⁷⁾のも「移動の到着点」を指す働き（國廣1980）¹⁷⁾を身につけようとしているためであると考えられる。

そうだとすると、「あの喫茶店にコーヒーを飲もう」は、存在場所を表す「に」と動作場所を表す「で」との混同ではなく、到着点を表す「に」と動作場所を表

す「で」の混同によるものである可能性がある。この点を検証することは、今後の課題となる。

(2) 存在場所を表す「に」と範囲限定を表す「で」の混同による誤りの可能性

日本語能力が中級レベルの日本語学習者は、「に」を用いるべきではないところに、「いる」等の特定の動詞に着目し誤って「に」を多用してしまうことが報告されている(蓮池2004)³⁷⁾。「クラスで2人韓国人がいる」は、「いる」が用いられているにもかかわらず、「で」が用いられているので、上記のようなストラテジーを用いたとは考えられない。また、3.(1)に述べたように、日本語能力が中級レベルの日本語学習者は「に」を用いるべきところであっても、動詞の表す動作や作用に引かれ「で」を用いる(鈴木1978)³⁾。だが、この文には「いる」が用いられているため、動詞の表す意味によって「で」を用いたとも考えられない。

このような文を用いる日本語学習者は、「で」の動作が起こる場所を限定する作用(森田1980³¹⁾、田中・松本1997³²⁾)を身につけようとしているのではなかろうか。日本語学習者は、「で」を「に」や「を」と区別するために、「で」の動作が起こる場所を限定する作用(森田1980³¹⁾、田中・松本1997³²⁾)を身につけなければならないからである。「で」が、動作が起こる場所を限定する作用を持つのにに対し、「に」は、その場所に定位する、もしくは存在するという状態性の表現で、「で」のような行為の場所の限定意識がない(森田1989)¹⁰⁾。そして、「で」が単に、動作が起こる場所を限定する作用(森田1980³¹⁾、田中・松本1997³²⁾)を持つのにに対し、「を」は、動作との結びつきの強い動作中心の表現である(田中1977)⁸⁾。

ところが、存在を表す表現には、「絶対存在文」(西山2003)²⁰⁾であり、「特定の集合における要素の有無を表す表現」(金水2006)²¹⁾があるという解釈がある。そのため、「に」の「絶対存在文」(西山2003)¹⁹⁾であり、「特定の集合における要素の有無を表す表現」(金水2006)²¹⁾と「で」の表す「限定」(森田1989¹⁰⁾、田中・松本1997³²⁾、間淵2000¹⁴⁾)等)とが、日本語学習者にとって混乱の元になっているのではないかと考える。

久野(1973)¹⁹⁾は、存在文の基本的語順についての議論の過程で、あらゆる存在文には場所辞(locative)が不可欠であり、「米の嫌いなひとがいる」という表面上、場所辞を欠く文であっても、「この世

のなかに」、「どこかに」あるいは「今話題となっている場所に」と解釈されるべき文法形式L(場所)が基底構造において必要である、と主張している。それに対し、西山(2003)²⁰⁾では、「米の嫌いなひとがいる」を言い替えた「この世のなかには、米の嫌いなひとがいる」の「この世のなかには」を「米の嫌いなひと」の指示対象が位置する場所辞と考えるならば、「米の嫌いなひとがいる」が「場所存在文」の一種となるであろうが、実は「場所存在文」でもなく、「この世界を構成するメンバーのなかには」という意味であって、「絶対存在文」なのであると述べている。金水(2006)²¹⁾においても、「子供が公園にいる」が「物理的な空間と存在対象(主語の指示対象)との結びつきを表す表現」であるのに対し、「授業中に寝ている学生がいる/ある(寺村1982)¹⁸⁾」が「特定の集合における要素の有無を表わす表現」であることが述べられている。

すなわち、存在文には、「場所存在文」あるいは「物理的な空間と存在対象(主語の指示対象)との結びつきを表す表現」と、「絶対存在文」あるいは「特定の集合における要素の有無を表わす表現」とがある。このような「に」の解釈があるために、日本語学習者は以下のような「で」の「範囲・基準を定める限定の表現」と混同してしまう。

田中・松本(1997)³²⁾は、「藤沢でこの店が一番うまい」の「で」を「に」に置き換えることはできずとし、「藤沢で」の部分を実柄の妥当範囲の設定に用いることができるのは、「限定化の作用」が「で」に本来的に備わっているためであると述べている。また、例えば「京都に」とだけ言えば、「京都を対象指定し、動詞的チャンクに差し向けよ」が意味づけられるだけであり、一方、「京都で」と言えば、「京都の領域内で何が起こる」までを含意し、動作が起こる場所を限定する作用が働き、ここに両者の違いがあるとしている。間淵(2000)¹⁴⁾においても、「日本でいちばん好いところだ」の「日本で」は、「好いところだ」と判断・決定する上での範囲・基準を定める「限定」の表現であり、「で」が動作や出来事を述べる動詞文に現れるのではないという点で、他の「で」の用法と大きく異なっていると述べている。

「クラスに2人韓国人がいる」の「クラス」は、「場所存在文」ではなく「クラスの学生」という特定の集合における「韓国人」という要素の有無を表す「絶対存在文」の解釈も成り立つ。そのため、日本語学習者にとっては、「クラスで誰と仲がいい？」の「クラス」が「クラスの学生」という集合体を指し、「誰と仲が

いい？」と判断・決定する上での範囲・基準を定める限定の表現と混同され易い。つまり、「クラスで2人韓国人がいる」は上記の「クラスで誰と仲がいい？」のような範囲限定を表す「で」と「絶対存在文」の解釈をもつ「クラスに2人韓国人がいる」のような存在場所を表す「に」の混同によるものであると考える。

さらに、範囲・基準を定める限定の表現は、「大学で誰と仲がいい？」のように、場所を表す名詞句が文頭に置かれる。このことも、日本語学習者にとって、「に」と「で」の混同を招き易い一因となってしまうことが推測される。存在文の基本的な語順は場所を表す名詞句が文頭に置かれる（久野1973¹⁹⁾、寺村1982¹⁸⁾等）からである。そのため、構文的にも両者の混同の起こり易いことが予想される。よって、これらを仮説とし検証することも今後の課題となる。

参考文献

- 1) 顧海根 (1983) : 中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞、係助詞「も」、接続助詞「て」などを中心に－, 日本語教育, 49, 105—118.
- 2) 岡田美穂・林田実 (2007) : 日本語学習者による格助詞の混同－存在場所の「に」と範囲限定の「で」－, 日本語教育論集, 23, 3—15.
- 3) 鈴木忍 (1978) : 文法上の誤用例から何を学ぶか－格助詞を中心に－, 日本語教育, 34, 1—14.
- 4) 山田孝雄 (1922) : 日本口語法講義, 宝文館, 141—159.
- 5) 此島正年 (1966) : 国語助詞の研究, 桜楓社, 70—83.
- 6) 大野晋 (1977) : 日本語の助動詞と助詞, 大野晋・柴田武 (編), 岩波講座日本語7文法Ⅱ第4回配本 (全12巻別巻1), 岩波書店, 1—26.
- 7) 佐久間鼎 (1983) : 現代日本語法の研究<改訂版>, くろしお出版, 117—193.
- 8) 田中章夫 (1977) : 助詞 (3), 大野晋・柴田武 (編), 岩波講座日本語7文法Ⅱ第4回配本 (全12巻別巻1), 岩波書店, 359—427.
- 9) 山崎良幸 (2001) : 古典語の文法, 武蔵野書院, 230—248.
- 10) 森田良行 (1989) : 基礎日本語辞典, 角川書店, 318—379.
- 11) 松尾捨 (1969) : へー格助詞<古典語・現代語>, 松村明 (編), 古典語現代語助詞助動詞詳説, 学燈社, 346—365.
- 12) 西田直敏 (1977) : 助詞 (1), 大野晋・柴田武 (編), 岩波講座日本語7文法Ⅱ第4回配本 (全12巻別巻1), 岩波書店, 191—273.
- 13) 大野晋 (1988) : 日本語の文法[古典編], 角川書店, 67—71.
- 14) 間淵洋子 (2000) : 格助詞「で」の意味拡張に関する一考察, 国語学, 51, (1), 15—30.
- 15) 鈴木一彦・林巨樹 (編) (1985) : 研究資料日本語文法第7巻助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典, 明治書院, 122—125.
- 16) 橋本進吉 (1969) : 橋本進吉博士著作集刊行委員会 (編), 橋本進吉博士著作集第八冊助詞・助動詞の研究, 岩波書店, 109—173.
- 17) 國廣哲彌 (1980) : 総説, 日英語比較講座第2巻文法, 大修館書店, 1—22.
- 18) 寺村秀夫 (1982) : 日本語のシンタクスと意味第Ⅰ巻, くろしお出版, 71—161.
- 19) 久野暲 (1973) : 日本文法研究, 大修館書店, 58—60, 263—281.
- 20) 西山佑司 (2003) : 日本語研究叢書第3期第2巻日本語名詞句の意味論と語用論－指示的名詞句と非指示的名詞句－, ひつじ書房, 393—417.
- 21) 金水敏 (2006) : 日本語存在表現の歴史, ひつじ書房, 13—114.
- 22) 奥田靖雄 (1983) : に格の名詞と動詞とのくみあわせ, 言語学研究会 (編), 日本語文法・連語編 (資料編), むぎ書房, 281—323.
- 23) 北原博雄 (1998) : 移動動詞と共起する二格句とマデ格句－数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察－, 国語学, 195, 15—29.
- 24) 定延利之 (2004) : モノの存在場所を表す「で」?, 日本語の分析と言語類型－柴谷方良教授還暦記念論文集－, くろしお出版, 181—198.
- 25) 山田進 (1981) : 機能語の意味の比較, 國廣哲彌 (編), 意味と語彙, 大修館書店, 53—99.
- 26) 松村明 (1957) : 江戸語東京語の研究, 東京堂, 329—334.
- 27) 菅井三実 (1997) : 格助詞「で」の意味特性に関する一考察, 名古屋大学文学部研究論集, 文学, 43, 23—40.
- 28) 浅山友貴 (2002) : 場所格ニとデの差異をめぐって, 東京大学留学生センター紀要, 12, 83—106.
- 29) 仁田義雄 (1997) : 日本語文法研究序説－日本語の記述文法を目指して－, くろしお出版, 46—52.
- 30) 益岡隆志 (2000) : 日本語文法の諸相, くろしお出版, 100—104.

- 31) 森田良行 (1980) : 基礎日本語2－意味と使い方, 角川書店, 321—323.
- 32) 田中茂範・松本曜 (1997) : 日英語比較選書6空間と移動の表現, 研究社出版, 35—49.
- 33) 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986) : いわゆる日本語助詞の研究, 凡人社, 281—375.
- 34) 加藤重広 (2006) : 対象格と場所格の連続性－格助詞試論 (2)－, 北海道大学文学研究科紀要, 118, 134—160.
- 35) 久保田美子 (1994) : 第2言語としての日本語の縦断的習得研究－格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について－, 日本語教育, 82, 72—85.
- 36) 松田由美子・斎藤俊一 (1992) : 第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究, 世界の日本語教育, 2, 129—156.
- 37) 蓮池いずみ (2004) : 場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察－中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析－, 日本語教育, 122, 52—61.

Received date 2015年1月7日